

ふるさと探訪

(11)

明治の終わりがころまで、

由良川をまたぎ位田町と井倉町を結ぶ橋は全く存在しなかった。当時は川面を渡し舟が行き来し、人や物資の輸送が頻繁に行われた。位田町側にあった舟着き場一帯には商店や宿屋などが建ち並んでいた。その名残から、現在も「市場」という地名が残る。

七十九歳で最近亡くなった地元の古老、田中義夫さんが生前に残した書き物によると、初めて「位田橋」が架けられたのは明治末期。当時の橋は木製で幅が九十センチほどのものだった。それでも対岸に田んぼや桑畑を持っている人が多い位田町の住民にとっては、日常生活に欠かせない重要な橋だったらしい。

橋が出来たことよって、大水によって荒れ狂う由良川と住民との戦いが始まる。橋が流れる度に、住

新・旧位田橋

時を超え住民生活に密着

約90年間で幅員は10倍近くにも

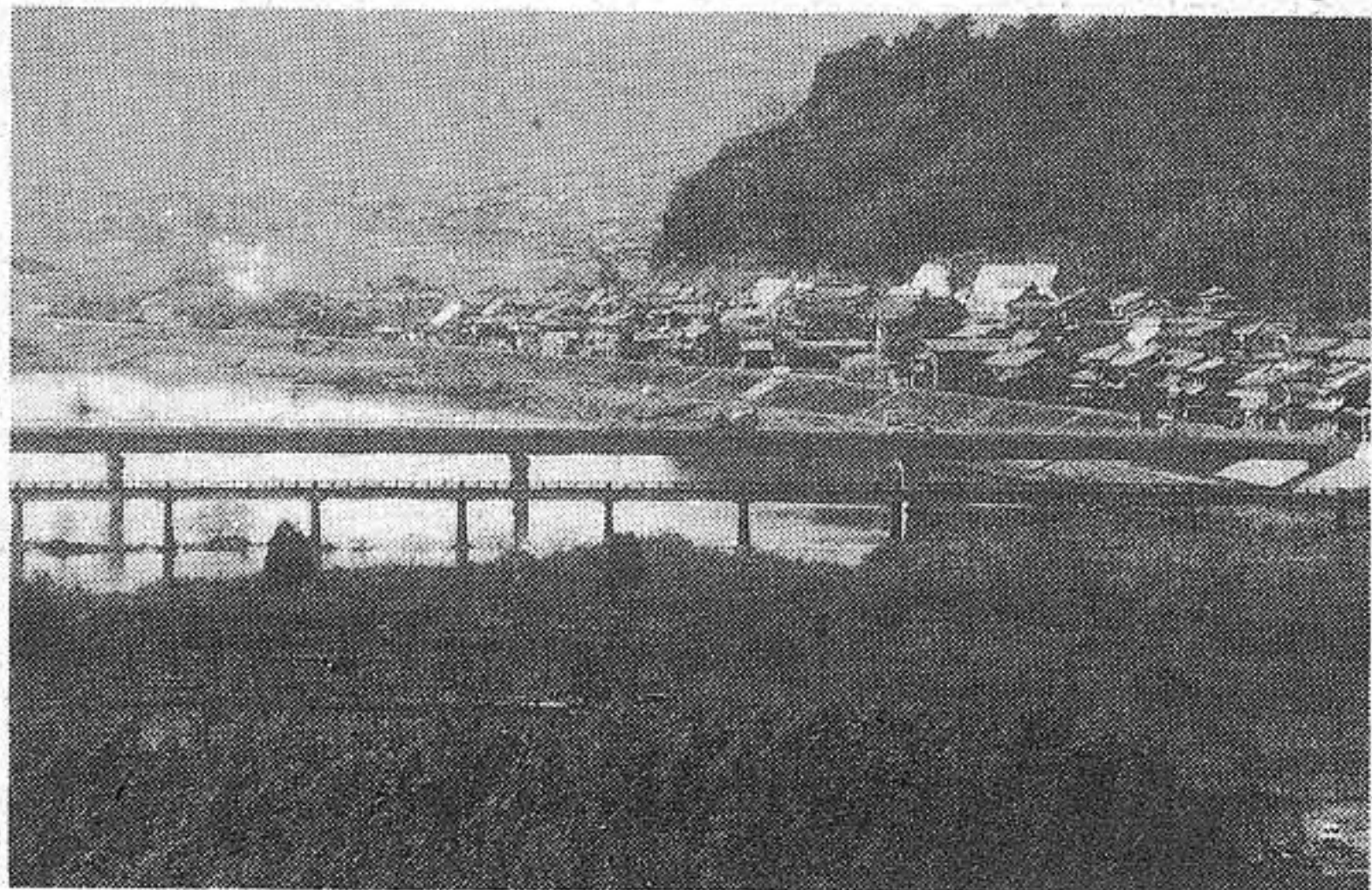
民らは区有林の材木を使い、何度も修復した。大正時代になってからは橋の幅を一・五倍に広げるとともに、橋げたを強固にして更に丈夫なものに変えた。また、この時は、大水の際、あとで修復がすぐできるような橋の中央が左右に分かれる構造にされた。

昭和十年ころ、リヤカーが一台通れるぐらいのこの「位田のがたがた橋」は、映画のロケ地として活用されたこともあった。当時、小学生だった大槻哲雄さん(73)「位田町」も撮影現場を訪れ、沢村国太郎さんら往年の時代劇俳優の演技

に見入ったそうだ。撮影が突然、中断されたこともあり、「グンゼの午後三時のサイレンが鳴ったためかもしれない」と大槻さんは記憶をよみがえらせる。橋は昭和十五年には幅員が一・八倍になり、横板にはヒノキが使われ、高さ二十センチの欄干も付けられるな

ど一段と立派なものに変ほうし、渡り初めといった祝賀行事も行われた。その一方、終戦まで多くの若者たちが住民や高城山に見送られながらこの橋を渡って古里に別れを告げ、戦地に赴いて行った。

戦後、豊里村の村上頼太郎村長や村議たちが中心となり、国庫の補助事業を活用して再び橋が新しく架け



由良川に架かる新旧の2本の位田橋。手前の旧橋は今秋ごろには長年の使命を終え、姿を消す(里町の久田山展望台から写す)

建設を求める声が高まっていった。その要望にこたえて村では木橋からコンクリート橋にすることで建設に着手した。だが、工事は難航。その後、三十一年四月の市村合併によってこの事業は綾部市に引き継がれ、三十三年四月に延長二百三十一尺、幅員四・六倍の橋として生まれ変わった。約三十六年間、この橋が

担ってきた使命も、先月十二日に延長約三百四十五尺、二車線で歩道付きの新しい橋が開通したことで、またバトンタッチされた。約九十年間の時代の中で位田橋は大きく分けてこれで五回、姿を変え、幅員だけを見てみると当初の十倍近くにまで広がった。位田町内の五自治会は開通式の日、高城館で祝賀行事を開催。その際、住民らから寄せられた位田橋にまつわる写真や史料などが会場に展示され、多くの人たちが往時を懐かしんだ。また会場では、町内が近年、由良川改修や府道舞鶴綾部福知山線の拡幅、そして今回の新位田橋の開通など大きく変化してきていることに関連し、昔の地域の様子を記録として残すために何か冊子にまとめたかどうかという話も住民の間から出ていたという。

(細見)